

週刊センターニュース No.295



第295号(2010年2月1日) 毎週月曜日発行
発行：金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

○●○ 第257回共同学習会のご案内 ○●○

日時： 2月9日(火) 16時30分—18時00分 ※開催曜日が通常と異なりますのでご注意ください。

会場：角間キャンパス総合教育1号館6階 E1講義室

テーマ：公開シンポジウム「大学教育の分野別質保証に向けて—日本学術会議からの報告」参加報告

企画者：堀井 祐介(大学教育開発・支援センター)

報告者：堀井 祐介(大学教育開発・支援センター)

概要：昨年11月23日(月)に東京大学安田講堂で開催された公開シンポジウムの内容について紹介させていただきます。

当該シンポジウムは、日本学術会議が、文部科学省から「大学教育の分野別質保証の在り方に関する審議」の依頼を受けて進めている作業の途中経過報告であり、分野別質保証のための参照基準、教養教育の在り方、職業と大学の関わり方、産業界の考え、質保証などの観点から報告がなされた。

○●○ 日本の”科学技術コミュニケーションのこれから”参加報告 ○●○

2010年1月23日から24日にかけて北海道大学で行われた「日本の”科学技術コミュニケーションのこれから”」のこれからは、そのタイトル通り、日本における「科学技術コミュニケーション」の現状と展望を検討するもくろみの元に開催されたものだ。日本における科学技術コミュニケーション活動の先鞭とっていい北海道大学科学技術コミュニケーター養成講座(CoSTEP)が、これまで何をしてきたのか、そしてこれから何をしようとしているのか、その「現場」に立ち会うことができたと言ってよいだろう。

北大CoSTEPの石村源生氏の講演「科学技術コンテンツを「コミュニケーション生態系」の中に位置づける」では、CoSTEPでのこれまでの活動を紹介しつつ、「科学者の言語空間」をどう「市民の言語空間」とクロスさせていくかについての検討が行われた。

Lloyd Spencer DAVIS氏の講演「Science Communication from a Down Under Perspective」は、サイエンスコミュニケーションの現状について、北米、オーストラリア(含むニュージーランド)、アジアで比較していく試みであった。非常におおざっぱにまとめるならば、北米の傾向は「理論」重視であり、オーストラリア、ニュージーランドは「実践」重視と素描できるという。その中でアジアのサイエンスコミュニケーションは、まだ「これから」の状況であるという点から、「理論」と「実践」をうまく配合することでより豊かな発展が遂げられるであろうと述べられた。

これに関しては、私見となるが、氏のいるニュージーランドでは、「サイエンスコミュニケーション」が大学の専攻において「修士号」が与えられる地位が確立されているという状況が深く関わっており、単純にそれを日本に適用することは、比較による錯誤を引き起こすのではないかと所感を若干抱いた。日本において「サイエンスコミュニケーター」は、現在、資格として何らかの社会的意義を付与されているとは言い難い現状にある。そうした日本の状況と、(おそらく)「サイエンスコミュニケーター」が大学で学位として認定されるニュージーランドと単純に重ね合わせることはできないのではなかろうか。また、そこにおいて「実践」のみで認められるということ自体が、「サイエンスコミュニケーター」の地位が安定していることの証左なのではないか、と考えた。(勇み足を承知で言えば、アメリカにおいて「理論」が重視されているのは、そこにおいて「ペーパーを出す」ことが避けられない状況にあることを示しているのではなかろうか)

三上直之氏の講演「CoSTEPでの「対話の場の創造」の実践：科学技術への市民参加に向けて」と題し、CoSTEPでの実践を元に、どのようにして「対話の場」を作っていくことが可能かに関する検

討が行われた。興味深かったのは、「サイエンスカフェ」の「功罪」に関する議論である。日本において現在、「サイエンスカフェ」を銘打つイベントは、年間千回以上行われているという。その内実はともあれ、これは異常とも言えるほど大きな数字である。そこに、日本の「サイエンスカフェ」の「負の面」があるのではないか、という問題意識のもとに、「対話の場」として真に意義のある場を創造するためには、どうすればよいのか、が示された。

Tom WAKEFORD 氏の講演「Third-order thinking in science communication」では、「サイエンスコミュニケーション」における「第三の面」をどう発展させていくかが議論の焦点となった。いわゆる「科学者→市民」への一方向的知識の伝達という「第一局面」から、「市民の声を科学者が吸い上げた上で実践」する「第二局面」、そして今後求められて行くであろう「市民」⇔「科学者」の間の循環するリフレクション構築という展望を語っておられた。

小林傳司氏の講演は、「科学技術コミュニケーション」をめぐる、「歴史」から「今後の政策」面にわたる、幅広い問題の整理と展望を語るものであり、シンポジウムの最後をまとめるものとして、そして日本の科学技術コミュニケーション推進の一極を代表する立場の講演として非常に有意義なものであった。

まさに、日本の科学技術コミュニケーションは、「次の局面」に入ったことを実感させられるシンポジウムであったと言えよう。
(文責：FD・ICT 教育推進室 竹本 寛秋)

○●○ 第7回大学教育セミナー開催のご案内 ○●○

近年、大学教育において、授業を教員から学生への単なる「知識の伝達」の場ではなく、教員－学生の双方向性、または学生間のコミュニケーションを通じて学ぶ、「知識の構成・再構成」の場として捉える考え方が強くなってきています。その状況下において、グループワークを中心とした問題解決学習、探求学習やプロジェクト学習など、アクティブラーニングと総称される、学習者の能動性を引き出す授業形態も導入されています。しかし、アクティブラーニングにおいて、教員は知識の伝達者だけではなく、学生の積極的な学習を支援する、いわばファシリテーターという役割を担うことになり、具体的なアクティブラーニング実施法について不明な点も多くあります。またアクティブラーニングは教員が主導する授業形態ではないことが多く、その授業形態を演出し支援する学習空間についても検討が必要となります。

そこで、本セミナーではまず日本で数多くの様々な教育実践、教育研究を取り組んでおられる白鷗大学教授 赤堀侃司先生より、アクティブラーニング実施の上で最も重要なことである学習者の能動性を引き出すために教員が考えるべきことについてご講演頂きます。また、アクティブラーニングの実践・研究をされている先生方をお招きし、アクティブラーニングの理論や実践、今後の展開についてご講演頂き参加者の皆様と大学教育のこれからについて活発な議論をしていきたいと考えています。
主催：大学教育開発・支援センター 共催：大学コンソーシアム石川 後援：日本教育工学会
テーマ：「アクティブラーニングが創る大学教育の未来」

日時：2010年2月22日(月) 12:30 受付開始 13:00 開始

会場：金沢大学サテライトプラザ(金沢市西町三番丁16番地 金沢市西町教育研修館)

プログラム

13:10-13:30 趣旨説明 山田政寛(金沢大学 大学教育開発・支援センター 准教授)

13:30-14:30 基調講演 主体的な授業を求めて－私の実践から－

赤堀侃司(白鷗大学 教育学部 教授/東京工業大学名誉教授)

14:45-15:30 講演 知識・技能・態度の全体的育成を目指すアクティブ・ラーニング

－授業デザイン評価の関連に焦点づけて－

溝上慎一(京都大学高等教育研究開発推進センター 准教授)

15:30-16:15 講演 学習空間とアクティブラーニング－東京大学 KALS の実践をもとに－

西森年寿(東京大学 教養学部附属教養教育開発機構 特任准教授)

16:30-17:20 パネルディスカッション 司会 山田政寛 パネラー：赤堀侃司、溝上慎一、西森年寿

※参加申込：件名を「2月22日大学教育セミナー参加希望」として、所属・職名・名前・情報交換会参加可否を明記の上、2月17日(水)までに電子メールにて山田まで(mark@mark-lab.net)。